わが人生のキーワードは 朝鮮・韓国

吉川 利文

人生にキーワードとかテーマがあるとすれ ば、私の場合、「朝鮮・韓国」である。

まずは小学生のころの不思議な体験。母に連れられ、母の古い知人宅を訪ねたときのこと。 太平洋戦争中の昭和 19 年、父が鐘紡の朝鮮・平壌工場に就職した時、国内では学童疎開が始まった。「家族がバラバラになるより」と、疎開代わりに母、子どもたち 4 人の家族全員が父のいる平壌に移り住むことになり、平壌の鐘紡の社宅に入った。私はその時 2 歳。

母の古い知人というのは、同じ社宅マンションに住んでいて、家族ぐるみで親しくしていただいた方で、戦後引き揚げて大阪にある鐘紡の社宅マンションに住んでおられた。我が家も大阪に移住したのを機会に再会することになった。

奇妙なことに、私はそのマンションの階段を 上っていて、ここはいつか来たところだ、と思 い始めた。母にそのことを言った。母は首を傾 げ「ここへ来るのは初めてだけど…」という。 「でも、造りは平壌で住んでいたマンションと 全く同じ」と付け加えた。2歳児の脳裏に焼き 付けられた残像が蘇ったのであろう。

次のご縁は大学の卒論。私が在籍した大学の 専攻科目は東洋史だが、朝鮮史なんて分野はない。でも私は迷わず、卒論のテーマに朝鮮現代 史を選んだ。幼時になじんだ朝鮮を知りたかったのである。タイトルは「1894年の朝鮮東学 農民戦争」である。朝鮮王朝の圧政に対し、農 民たちが武装蜂起し、一時、朝鮮半島は内戦状態になる。これに介入した日本と当時の中国・ 清とが衝突して日清戦争となった。農民の武装 蜂起を指導したのは、東学党という宗教団体の 全琫準という人物。卒論はまるで「全琫準物語」だが、私は彼を資料の写真でしか知らない。

ところが、彼と不思議な出会いをする。2018年

10 月。ホームステイを通じて市民レベルの国際交流活動をしている団体のメンバーとして私と妻は韓国ソウルの市民宅にホームステイした。そんなある日、ソウル市内のとある街角で、民族衣装の老人が立て膝で座っている銅像を見つけた。台座には、像の人物を「全琫準」と刻んである。なんと半世紀ぶりに、ソウルの街角で卒論の主人公に出会った。

「朝鮮・韓国」とのご縁の極めつけは、現役時代の新聞記者としての報道である。

1975年 11 月、当時の韓国の軍事独裁政権下で、在日韓国人の青年、学生らの母国留学生が続々と「北朝鮮のスパイ」という容疑で逮捕・起訴される事件が発生。その後約 10 年間に約 160 人が逮捕・起訴された。被告やその家族らは一様に「無実だ」「政治的なでっち上げだ」と主張する。朝鮮・韓国にゆかりの私としても放っておけない。念入りに取材した。が、容疑らしいものは浮かんでこない。調べるほどに、私も彼らが無実であるとの確信を強め、同僚があきれるほど克明に報道をし続けた。

逮捕された人たちは裁判にかけられ、有罪判決を受けた。うち 5 人に死刑判決が出て確定した。いつ処刑されるかわからない状況になった。ところが、この 5 人はなぜか一向に処刑されなかった。

1987 年以降の民主化された政権下で、再審裁判が開かれ、次々と有罪判決が覆り、逮捕・起訴された人たちのほとんどが無罪となり、家族の待つ日本に帰った。5 人の死刑確定囚も、である。

2019年6月28日、朝日新聞の社会面に2段の控えめな記事に私は驚いた。わが国で開かれた主要20カ国・地域首脳会議(G20サミット)に出席するため来日中の韓国文在寅(ムン・ジェイン)大統領が、在日韓国人との懇談会の席上、この事件について触れ、「独裁権力の暴力に深く傷ついた在日同胞の被害者と家族に、大統領として国家を代表して心から謝罪する」と語ったという。報道しているころ、内心不安がなかったわけではない。これで、完勝、だ。記者冥利に尽きる。

「朝鮮・韓国」は、わが人生を面白くにも、不思議にもしてくれた。カムサハムニダ(ありがとう)。